第2号様式(第7条関係)

平成２２年度政務調査費収支報告書

会派名　　稲城・生活者ネットワーク

1　収　入
　政務調査費　　３００，０００円

2　支　出　　２４６，０２５円

(単位　円)

科　目	金　額	主たる支出の内訳
研究研修費	16,700	研修会参加費
調査費	89,637	視察
資料作成費	1,245	コピー
資料購入費	58,000	広報紙購読、書籍
広報費		
広聴費	1,200	会場費
通信費	30,000	FAX,通話料
事務費	49,243	インク、地図　他
その他の経費		
合計	246,025	

3　残　額　　５３，９７５円

議長	副議長	事務局長	次長	係長	係長	係
川島	信法	小林	福田			

備考

会派研修終了報告書

研修日	2010年8月16日～18日
研修先	社会福祉法人浦河べてるの家
主要調査 研修課題	精神障がいをもつ人が地域生活を送るために必要な就労、住居、地域活動拠点について調査する。また職場でのケアのあり方、ピアサポート、共同生活援助について調査する。
研修終了報告	別紙にて報告
参加者 氏名	中村 みほこ

稲城市議会議長

川島やすゆき 殿

上記のとおり、会派研修を終了しましたので報告します。

平成 22 年 8 月 25 日

会派名 稲城・生活者ネットワーク

氏名 中村 みほこ

収受
稲城市議会
22.8.25
第 号

視察報告

生活者・ネットワーク
中村みほこ

2010年8月16～18日

■社会福祉法人　浦河べてるの家

北海道浦河町には、人口約14000人のうち約150人がべてるの家の関係者だ。登録している当事者は約100人いる。職員30人。当事者6人がスタッフとして共に働いている。

●べてる就労サポートセンター

就労継続支援Ｂ型（30名）、就労移行支援（18名）、生活介護（12名）

【ニューべてる】

日高昆布を仕入れて加工販売している、製造チームの他に発送チームや見学や研修に来る来客者対応するオリエンテーションチーム、オリジナルグッズの企画・製作・販売を行うグッズチームがある。

【べてるセミナーハウス】

べてるめんめんチームが無添加のうどんを完全受注生産販売し、カフェのメニューにもなっている。

新鮮組はべてるの各拠点・住居のゴミ回収・リサイクルなどする清掃業務や自転車パンク修理など行っている。

【四丁目ぷらぷらざ】

まちづくりのための店としてオープンした「カフェぷらぷら」では商品販売などを通して、接客の練習をしている。

●べてる生活サポートセンター

グループホームで３０名、ケアホームで２５名が生活し、世話人・支援員が生活支援を行っている。その他共同住宅が5か所あり、合計８０名以上のメンバーが暮らしている。

■有限会社　福祉ショップべてる

介護用品事業や清掃請負

■ＮＰＯ法人　セルフサポートセンター浦河

当事者が立ち上げ、ピアサポーターの育成・派遣を行い、当事者同士のネットワークを強化する他に、地域交流部や国際交流部もある。

■回復者クラブ　どんぐりの会

会員数１００名の当事者自助グループ。各種の事業で相互支援している。

■協同オフィス『いいっ所』

一人一起業。得意分野で仕事をシェアしている。

「べてるの家」は３０年前に精神障がいを抱えた人たちが退院後浦河で「支えてもらうだけでなく、まちのためにできることはないか？」と考え、産品の日高昆布を売る商売から始まった。「地域のために」「社会復帰から社会進出」、「三度の飯よりミーティング」等の活動理念があり、起業し商売にも挑戦し続けている。さまざまなグッズ製作、介護用品事業や清掃請負、完全受注生産での無添加うどん製造。2009 年にはまちづくりとしてカフェをオープンした。

べてるで仕事をするポイントは、まず自分の苦労や弱さを情報公開すること。そのために数多くのミーティングを開催し、お互いの励ましの場をつくっている。「安心してサボれる職場づくり」という理念があり、「体調・気分・仕事の内容や時間」を伝え、自分を上手に助けながら働く工夫をしている。「手を動かすより口を動かせ」作業中もメンバーとのコミュニケーションをとおして、病気との付き合い方を練習している。
精神障がいという苦労を抱えながら地域で生活するために、薬だけに頼っていては良くない。一番必要なのは、人とのつながり「仲間」だという。お互いに困った時は助け合うのがべてる式。
回復（リカバリー）に結びつけるために、認知行動療法に基づいた自分を助けるプログラム、当事者研究やＳＳＴ（生活技能訓練）、また様々な場面でミーティングが数多く開催されている。誰もが持っている生きにくさを仲間と共有し、話し合い研究しながら苦労の対処方法を見つけ出す当事者研究が、最近では町民の方々も自らの苦労を題材に取組み、研究報告もあるという。小学校の総合学習で当事者が語るという地域交流も行われている。
病気体験を発信することで「生きやすい町づくり」を提案している。語ることで安心、自信を得、共感することで仲間が増える。浦河は病気があっても「居場所」のあるまちになっているのだ。

今回の視察で、オリエンテーション、仕事ミーティング、ＳＳＴ、振り返りミーティング、朝のミーティングに参加した。メンバーの方々の明るさやミーティングの和気あいあいとした雰囲気の中で行われる、良いコミュニケーションの実践を体験できた。
また、様々な施設を見学し、仕事とＳＳＴを繰り返しながら、仲間とのつながりが回復につながっていると実感した。
何らかの生きにくさや苦労・問題は病気の有無に限らず、誰もが抱えている。自分の持っている弱さを勇気をもって情報公開することで、絆をつくり支え合う仲間を増やしている「べてるの家」の実践は、これからどんな人にもどこのまちにも必要だと感じた。